〈巻頭論文〉

植民地の複話術師たち
―朝鮮作家の日本語小説著述について―

金　哲

翻訳／沈　熙燦

でも、絃のどこか心の一隅には、俺は今姉と一緒なのだといふ自覚が生じたので、今度は何故とはなしびつくりしたやうに後を振り返つてみた。その時、彼の目にはベンチを離れて槐樹の杜の方へ脱兎のやうに逃げて行く青い支那服の姉がちらりと見えた。絃は一層驚いて弾かれたやうに飛び出した。

「待ちなさい！待ちなさい！」しかし今まで伊藤と内地語で語り合つたばかりなので、思はずそれは内地語だつた。しかも彼は今自分が内地語で叫んでゐるのだといふことに気付かなかつた。言葉は分らないが、弟の大声に姉は射すくめられたやうになつて、一度振り返つた。丁度そこへ伊藤が一体どうしたのかと叫びながら絃の方へ駆け寄る。それを見ると、伽倻はいよいよ妄想の恐怖に捉はれ杜の中へ消え失せてしまつた。絃は又絃で何も考へる余裕もなく、姉の後を追ふて走りながら、振り返り「又合はう、又合はう」と叫んでゐた。伊藤は呆気にとられて呆然と立つたままだつた。（一）

金史良（キム・サリャン、一九一四―五〇）の小説「郷愁」（一九四〇）から引用した上の場面は、韓国小説および韓国語に関する、とても難解で複雑な問題を提供している。この小説は、日本語で書かれ、日本の文学雑誌である『文芸春秋』に載せられた。では、この小説は日本文学に属するものであろうか。答えはそう簡単にはいかない。この質問はしばらくさておいて、まずは上の場面に注目してみよう。

舞台は一九三八年の北京、まさに日中戦争の砲煙が中国全土を覆い尽くしていた時期だ。話者の絃（李絃、リ・ヒョン）は、幼いときに離れられた姉（伽倻、ガヤ）と義兄（尹長山、ユン・ザンサン）と合うために北京に赴く。姉と義兄は、三・一運動に参加した後、

中国に亡命したかつての独立闘士であったが、今は惨めに没落し、アヘンの密売などで辛くも生計を立てているのみである。

上の場面で絃は、姉伽倻の案内で北京の北海公園を見回っていた。姉は草臥れた生活に追われつつも、久々の余裕とゆったりとした時間を、弟と公園を歩き回りながら満喫していた。そのさい、公園の向こう側から近寄ってくる日本の軍人たちに目が留った姉は、恐怖にかられてしまう。亡命した独立闘士の妻として、またアヘンの密売者として、つねに憲兵や官吏の視線を意識せざるをえなかった彼女にとっては、肩にカメラをかけながら公園をぶらついている日本の軍人さえもが、恐怖の対象であったのだ。折悪しく緊張している姉のところにその日本の軍人たちがやってくる。

つぎの瞬間、絃は「おやつと叫びながら思はず立ち上」がる。その軍人の中の一人が、絃と高等学校、大学の同窓であり、「高校の時分からお互ひ心の中で同志と叫んで手を握り合ふ間柄」であった伊藤少尉だったのだ。ところが話者である絃は、自分が伊藤少尉と日本語で会話を交わしている、ということに気がつかない。ほんの少し前までは姉と朝鮮語で話していたのだが。やがて話者は姉のことに気がつく。しかし日本軍人の現れに怖じ気づいた姉は、背を向けたまま森の中に逃げ去っていた。話者は姉に「待ちなさい」と呼び止めたが、その声は日本語であった。しかも、かれは自分が日本語でわめいている、ということすら自覚していない。姉には弟の叫び声が理解できない。一応立ち止まった姉は、同じく日本語で喋りながら駆けてくる伊藤少尉をみると、またもや慌てて逃げだす。絃は、今度は伊藤少尉に「又合はう」と大声をあげ、姉を追っていく。伊藤少尉は事情がわからず、あっけにとられて眺めているだけだ。これが上記の場面における前後の状況である。

姉が日本語をわからないがゆえに起きてしまった、一種のハプニングに過ぎないといってしまえば、済むことであるかも知れない。しかし、偶発的な事態において、三人の意思伝達が完全なる不能の状態に陥ってしまうこの場面から、われわれは被植民地の言語状況に対しての、なにか有用な思考の手がかりをえることができるのではなかろうか。作者自身の履歴と一致する話者絃は、朝鮮語と日本語といった二重言語の所有者である。かれは日本語で高等教育を受け、その言語をもって自らの経歴を築きあげてきた人物でもある。しかし、かれの流暢な日本語はこの危機の瞬間において、日本語がもたらした誤解を解きほぐすことができない。否、むしろかれの日本語は誤解をさらに増幅させるだけなのだ。自分が日本語で叫んでいるという事実すら意識できないまま、日本語でわめけばわめくほど、かれは自分の兄弟から遠ざかるのである。しかも、自分の言葉を理解する帝国の支配者もまた、かれの行動が理解できず、うろたえているのだ。植民地における二重言語使い、あるいは二重言語を用いて物を書く作家の運命を、これほど正確に象徴する場面が他にあるだろうか。

植民地期において、はじめて日本語で小説を書き、日本文壇に作家としてデビューしたのは張赫宙（ジャン・ヒョクジュ、一九〇五―一九九八）である。慶尚北道大邱のある小学校で教員を務めていた二七歳の朝鮮人青年張赫宙は、一九三二年、日本の有力な左翼総合誌『改造』の懸賞公募に「餓鬼道」という小説が当選して、植民地出身者としてははじめて日本文壇に派手やかに登場した。自らの日本語小説創作の動機を「民衆の悲惨なる生活を広く世界に知らし

めた」かったと説明している張赫宙の小説「餓鬼道」は、折しも沈滞に陥っていた日本プロレタリアト文壇に「地主階級と日本帝国主義の搾取に苦しめられている朝鮮農民の悲惨な生を告発」した佳作として高く評された。

だが、張赫宙の日本文壇への進出が、朝鮮文壇から歓迎されることはなかった。それが母国語と同族に対する裏切りとしてみなされていたことは、十二分に推し量れることであろう。張赫宙は朝鮮語小説も発表したが、注目を集めることはなく、かれと朝鮮文壇との関係はますます悪化していくばかりであった。ついにかれは、一九三五年に「文壇ペスト菌」という文章で大きな物議をかもし、一九三七年には日本に移住してしまう。とはいえ、かれと朝鮮文壇との関係が途切れることはなかった。一九三八年、張赫宙が著わした戯曲「春香伝」が、日本の有名なる演出家である村山知義によって日本全国で公演されたが、それがまた朝鮮においても公演されたのである。解放を迎えるまで、かれは日本語と朝鮮語の両方で創作活動を行いつづけた。太平洋戦争期、張赫宙は他の多くの作家たちと同様に、日帝の戦争体制に協力する文章を書き、または宣伝活動にも関わっていた。

張赫宙の生涯は、この短文では扱いきれないぐらいにドラマチックなものだったし、なお作家としてのかれの軌跡が植民地朝鮮文学や朝鮮語に落としている影もまた深淵である。人々は、かれが日本語で物を書いたことを容易く非難するが、それは道徳の問題ではあるまい。被植民地民にとって帝国の言語は、権力の中心に接近できるなによりも有力な通路であった。英語を用いて創作活動をすることで、世界的な文明をえたアイランドやインド出身の作家たち、もしくはフランス語で語りかけを行っていたアフリカ知識人たちの事例は、帝国の言語が被植民地民にとって有用な武器となりうる、ということを示してくれているのだ。

さらば、日本語を使い日本文壇にデビューした張赫宙の「裏切り」を問う前に、四〇年に至る朝鮮新文学の歴史において、またそれに相当する期間の植民地支配以来に、なぜ日本語で創作活動を行おうとした作家が一人もいなかったのか、ということを問わねばならない。政治・経済・社会・文化の全てのところを掌握した「日本的なもの」の支配力にもかかわらず、朝鮮人による日本語創作が長い間試みられなかったことにはどのような理由があったのだろうか。日本語の圧力に耐えうるほどに、朝鮮語の歴史性と同質性が非常に強かったかも知れない。だが、帝国の言語を通じて帝国の中心に、さらに「世界」に向けて語りかけることを夢見ていた植民地出身の作家――ある意味で、これは極めて自然な現象でもあるが――が、非常にまれであったことは、日本帝国主義の朝鮮支配における特性を考えるさいに、依然として解きほぐしがたい問題の一つであるのだ。

張赫宙につづいて日本文壇に進出した朝鮮人作家が、先述した金史良である。金史良は、平壌出身として日本九州の佐賀高校を経て、東京帝大ドイツ文学科を卒業してからすぐ、一九三九年に短編「光の中に」を『文芸首都』に発表するが、この小説が翌年日本最高の権威を誇る芥川文学賞の候補に挙がる。東京の貧民街で暮らしている日本人と朝鮮人の混血児童の物語を描いたこの小説は、民族的アイデンティティに関する重い問いを提起し、作家の文名をとどろかす出世作となった。かれらの後をついで李殷直（リ・ウンシク、一九三九年に登壇）、金達壽（キム・ダルス、一九四〇年に登壇）、洪

鐘羽（ホン・ジョンウ、一九四一年に登壇）などの朝鮮人たちが日本文壇に登場することで、植民地出身の日本語作家という独特なる作家群が現われてくるようになる。

ところで、韓国新文学における最初の世代である李光洙（リ・グアンス、一八九二―一九五〇）や金東仁（キム・ドンイン、一九〇〇―一九五一）もまた、ある意味では二重言語の使用者であったといえるのではなかろうか。李光洙の最初の作品は「愛か」という日本語小説であったし、金東仁の小説もまた「構想は日本語で行い、それを朝鮮語に移す」過程を通じて誕生したものであるからだ。朝鮮の近代文学が、日本を経由したものであるということは明らかだが、そのゆえ、朝鮮の作家たちにおいて日本語は逃れることのできない宿命のようなものであっただろう。そうであれば、かれらはみな、ある程度は朝鮮語と日本語の二重言語の状況におかれていたともいえよう。

とはいえ、かれらの目標が日本語による著述活動に止まるものではなかったことも明白である。日本語を通じて文学を身につけただけに、朝鮮語と朝鮮文学がかれらにとっては絶対なる目標であったし、疑うことのできない実体でもあったことは間違いない。たとえ日本と日本語を通して近代文学や小説の著述を学んだとしても、かれらが望んでいたのは朝鮮語による朝鮮小説の創作であり、かれらはそれに邁進していたのである。要するに、朝鮮近代文学の建設こそがあらゆる植民地作家たちにおける目標であって、存在の理由でもあったのだ。一方、太平洋戦争期に入ると、朝鮮の作家たちに日本語の物書きが強いられていく。多くの作家たちがこれに従うが、その結果、朝鮮人作家たちによる数多くの日本語作品が、この時期に創作されていくようになる。しかし、この事実をもってかれらを二重言語使いの作家であると呼ぶことができないのは、かれらの意図と目標がつねに朝鮮語と朝鮮文学の樹立にあったからである。

その点で、張赫宙と金史良の著述は特異なる意味を有しているといわねばなるまい。かれらは最初から日本語で物を書き始めた。日本語から出発し、朝鮮語の物書きに向かっていこうとした植民地の作家たちとは、正反対の道を選んだともいえる。かれらは日本語で書き、日本に向かって（同時に朝鮮に向かって）語りかけようとした。だが、母語ではない日本語で物を書くということには、当然ながら難しい点が多分にあるので、張赫宙と金史良はその苦衷をしばしば打ち明けていた。だが、ありとあらゆる苦難にもかかわらず、かれらは日本語による創作の道を選択したのであり、自ら二重言語使いの運命を受け止めたのである。

さて、それはどのような結果を迎えただろうか。冒頭で引き合いにだしたような現象が起き上がったのだ。「朝鮮の現実を日本と世界に知らせるため」日本語で小説を書くというかれらの意図とは背くように、張赫宙と金史良は日本語で叫べれば叫ぶほど、自分の兄弟から遠ざけていくと同時に、日本語を使う人からも不可解なにかになってしまう（「郷愁」の話者のような）立場に陥っていった。朝鮮文壇はかれらから目をそらしたし、日本文壇は日本語で物を書く若い朝鮮人作家に対して、不思議なエキゾチシズム以上の反応をみせることはなかった。

張赫宙の「權という男」（一九三三年）、「奮ひ起つ者」（一九三三年）、「異俗の夫」、「脅迫」（一九五三年）といった重要な作品は韓国と日本の両国で無視されたし、かれの名前は解放後、林鐘國（リム・

ジョングウク）の『親日文学論』の片隅に「親日作家」として若干触れられているだけである。かれの作品集『追われる人々』と『少年』がエスペラント語に翻訳され、ポーランドとチェコで刊行されたこと、短編集『山靈』が中国語で翻訳・出版されたこと、それから八六歳を迎えた一九九一年に、インドの出版社を通して「絶望の旅程 Forlorn Journey」という英語で書かれた長編小説を刊行したことなどが、注目を浴びることは全くなかった。その代わりに、一九五二年日本に帰化したことで、在日朝鮮人たちからひたすら「民族を裏切った変節者」としてのみ記憶されるようになったのである。

金史良の作家としての経歴は長くないが、前述した作品以外にも「天馬」（一九四〇年）、「草深し」（一九四〇年）のごとく、日本の植民地支配の本質を扱っている重要な作品が日本語で書き上げられた。解放直前、かれは中国出張に付け込み、太行山にある朝鮮義勇軍部隊に加担し、武装抗日運動に参加する。韓国戦争が勃発すると、金史良は北朝鮮軍の従軍作家として活動したが、戦線で病気となり死亡した。

この若い作家の劇的な人生と作家としての冒険もまた、長い時間忘れられていた。韓国においてかれの名前は、同然の「親日作家」として一時論じられただけであり、北朝鮮では政治的な理由により忘却された。一九七〇年代になってから在日朝鮮人社会の中で金史良が「抵抗作家」の例として再び注目を浴びることとなり、北朝鮮ではかれの作品集が改めて刊行されるようになったのである（二）。

張赫宙と金史良から目をそらすのか、あるいは記憶するのか。問題はいずれもがその評価において特定なる政治的な理由を根拠にしている、という点である。日本語で書かれたかれらの小説が孕んでいる根本的な問題が、慎重に議論されることはなかった。張赫宙の日本語小説著述に対する朝鮮文壇の反応は、一九三六年八月に雑誌『三千里』に載せられた「朝鮮文学の定義、このごとき規定せんとす」という記事から垣間見うる。

「朝鮮文学は朝鮮の「文」で、朝鮮の「人」が、朝鮮人に「読まれる」ために書いた物」であるという朝鮮文学の一般的な定義に対して、この記事は当時の代表的な文人一二名の見解を問うている。「朝鮮の「文」で、朝鮮の「人」が、朝鮮人に「読まれる」ために書いた物」が朝鮮文学であるという定義について、応答した人々はみな同意している。ただ興味深いのは、この設問に張赫宙の名が挙げられ、「張赫宙氏の作品は朝鮮文学に属するのか」と質問されている点である。さらに大事なのは、張赫宙自らが日本語で書いた自分の作品は、朝鮮文学には属さないと答えているところである。

ここにおいて、朝鮮文学を構成する絶対的な条件としての朝鮮語は、疑いを入れない自明なものであるかのようにみなされていたのだ。一九三六年において朝鮮文壇は、張赫宙の登場と共に触発された朝鮮文学のアイデンティティに関する問いを、「朝鮮文学＝朝鮮語」という堅固なシェーマを再確認することで急き立てて縫合していたのである。そしてこのシェーマの自明さが改めて問われることはなかった。しかしながら、張赫宙や金史良のような作家たちがもつ意味というのは、ただ単に作品の国籍、言語の境界を確認し、かれらをそのどこかに属させることだけでは終わらないものであるだろう（この点からすれば、張赫宙自信も自らの行為が有しうる意味を正確に把握していたとは思えない）。

太平洋戦争期には、張赫宙や金史良の他にも数多くの朝鮮の作家

たちが日本語で物を書いたり、発言を行っていた。今日においてそれらは民族と母国語に対しての卑怯な裏切りの行為としてのみ覚えられているが、その記録らを綿密にのぞき込めば、全く思わなかった意外な側面が現われてくる場合が多い。長らく詳論する余裕はないが、要するに、敵の刃を掴んで敵を刈り取るという、ひやりとさせる精神の曲芸が繰り広げられている事例も無数にある。そのような記録を目の前にするたびに、私は言葉にできないほどの複雑な心情に囚われてしまう。

思うに、帝国支配の下で、帝国の言語で語りかける被植民地人は、一種の複話術師（三）であるのだ。かれらは一つの口で二つの言葉を喋る者、二つの舌をもつ者である。このぎりぎりのゲームにおいて、かれらは自ら分裂され、破滅される。しかし、それと同時にかれらの存在そのものが、母語の自然さ、国語のアイデンティティ、国民文学の境界に対する鋭利な匕首にもなるのである。もっぱら一つの言語のみを喋る者、母語の自然さの世界に囲まれて暮らしている者にとって、帝国が視野に収められることはない。帝国の言語をミミクリ mimicry する者、自分の言語ではなく異なる言語で異なる思考を試みる者においてのみ、ようやく転覆の可能性が開かれてくる。植民地における二重言語使いたちから、われわれはその可能性を見出しうるだろう。

だが長い間、韓国文学は、そして韓国人たちはかれらの二重言語を理解しようとしなかった。かれらの複話術が帝国の心臓を深く穿りうる鋭い匕首になる可能性に対しても熟考しなかったのである。たった一つの言語、独自なる国民文学の境界のみが、帝国の秩序に立ち向かう唯一な道になるという信念が疑われたことは一度もない。そのかぎり、韓国人は、そして韓国文学は弟の言語に仰天し、森の中に逃げだしてしまう姉の姿とさほど変わらぬものになってしまうだろう。

〈註〉

（一）金史良「郷愁」『文藝春秋』第一九巻第七号、一九四一年七月、三〇二―三〇三頁。

（二）張赫宙と金史良が解放後において、南と北でどのように読まれてきたのかに関しては拙稿「二つの鏡――民族言説の自画像を描くこと」（『尚虚学報』一七号、二〇〇六年、ソウル）を参照されたい。

（三）複話術 ventriloquism はもともと「腹話術」と表記されるがここでは意図的に「複話術」という表現を用いた。

（韓国・延世大学国文学科教授）
（立命館大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）